

●三増合戦とそのあとさき

信玄の駿河攻め

甲斐(山梨県)の武田信玄が永禄11(1568)年に駿河(静岡県東部)攻めをはじめた。その前の年、同盟関係にあった駿河の今川氏真が離反し、塩や魚の移出を停めてしまったことに対する報復と解決手段であったと思われる。

信玄は、永禄11年12月、東海道すじの由比に進み薩埵峠を攻め、今川氏真を駿府(静岡市)の城から掛川の方へ追い落とした。

これに対して小田原の北条氏康は、娘婿の氏真助勢のため、4万の大軍をもって、翌永禄12年1月、薩埵峠に出陣した。長いにらみあいとなったが信玄は遠州(静岡県西部)の徳川家康や越後(新潟県)の上杉謙信の動きも気になって、その年の4月末甲府へ引きあげた。

小田原攻め前しょう戦

信玄は、永禄12年6月、1万8千の兵をひきいて伊豆の三島や韮山などに攻めこんだ。村々を焼き、うちこわし、さんざん暴れまわり、川成島に陣を取ったが、洪水のため引き返した。

これに対して北条氏は、評定を行い、3万の大軍を伊豆から駿東へかけて分駐させ守りを固めた。

小田原攻め

この北条方の配置を知った信玄は、好機到来として、関東侵略小田原攻めの作戦を計画した。

武田方の主力2万は、永禄12年8月下旬に甲府を出発。道を北にとって信州(長野県)佐久に出て、碓氷峠を越え、群馬西部から埼玉へと南下。寄居町の鉢形城、吉見町の松山城を攻めた。また、分かれた一隊は、江戸のまわり、稲毛(川崎)、帷子(保土ヶ谷)などの諸所を攻め、各地を放火して歩いた。北条方の兵力はこれらの方面からも集められて伊豆や駿河の防備に行っていたため、武田方は大きな抵抗にあわずに進み、9月末頃諸隊は集結して拝島に本営をおいた。

一方郡内から八王子へ進出した武田勢は、高尾に近い十里山で北条勢を破り同じ日に拝島に着いた。

合流した武田方は、氏康の子北条氏照が守る八王子の滝山城を攻めたが、守りが固く、とても落ちそうにない。長びけば小田原攻めにさしつかえるので、信玄は2日間で囲みをと き小田原へと向った。相原、橋本、上溝を通り勝坂に出て、相模川を渡ってその夜は厚木付近に夜営、9月28日には増水中の酒匂川まで進んだ。

10月1日に小田原に突入した武田方は、池門あたりまで攻め込み、町々を焼き払った後、風祭に本陣を置いた。

一方北条方は駿豆方面に兵力を送っているため、城中には兵が少なく、十分な応戦は不可能であった。評定を行い、上杉謙信が攻めてきた時のように、ろう城作戦を取ることを決め、近辺に出ている兵をことごとく城中に入れ、防備に当たった。

武田方は城兵が出てこないのので戦いにならず、民家や社寺までも焼きはらい、乱暴をくり返した。



早雲寺蔵 北条氏康像



高野山持明院蔵
武田(晴信)信玄像